



文明と文化

Civillization / Culture

間 處 威 俊
Taketoshi Madokoro

EICA 名誉会員

我国の中・高等学校の社会の教科書には、世界四大文明として、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明が紹介されてきている。

この四大文明を提唱したのは、中国のジャーナリストで政治家の梁啓超で、自作の歌『二十世紀太平洋歌』中の「地球上の古文明の祖国に四つがあり、中国・インド・エジプト・小アジアである」との記述が原型であるとされている。この四大文明については今では不十分として、アメリカ大陸のメソアメリカ文明とアンデス文明を加えて六大文明とも言われている。

世界の文明を幾つかに区分することが人類の文明を理解する上で妥当かどうかは別として、人類の文明の発祥に欠かせないのが水とのかかわりである。そのことは文明の発祥地が「肥沃な三日月地帯」にあると言われていることでよく表されている。

地球上の全ての生物にとって水は命の維持に欠かせないものであることから、人類の文明が水と切り離せない地域に発祥したことは当然のことである。この水を戦略の最も重要な「かなめ」の一つにしていたのがローマ人であった。

ローマの地は文明の発祥地としての区別はされていないが、領地拡大のための武力制圧後の統治に最も必要なこととして、ローマからの街道の整備と、水道の敷設整備に最も力を注いだのがローマ人だった。現在のローマでもその時代の水道が2系列使われ続けている。

また、アンデス地帯においても、高地に雨水の大きな石組の貯槽の跡があり、当時の統治者が水の確保に力を注いだことを窺うことができる。

人類は、火と水を使いこなすことで現在の進化を達成してきた。この使いこなす文明が、その後の文化を発祥させることになったのではないだろうか。

文明と文化の語源は、英語の Civilization と Culture が翻訳されたものである。Culture の原義は「城(都市)を築く」であり、人類が生み出したものを全て含み、ソフトウェアに相当すると言える。一方文明の原義は「都市化」で技術の発展が他への影響を与えることで、有形に物質を現したハードウェアに相当しているとも言われている。

文明の中心になるのは建築関係が主体であった。水の利用に関しては河川や泉からの水道や分配槽、貯留

槽等の建設技術であった。これ等の技術の発展が人類の集団化、都市化を進めてきた。ローマの水道は紀元前から現在に残る技術で広大なヨーロッパから西アジアに広がる「水のローマ文明」と言える。当時使われたセメントや建設技術は今にも通ずるものがある。

地球規模でグローバル化が進む現在では、時々西欧文明とか東洋文明とか分けて言われていることに、本来の文明の意味はなくなってきている。文明の言葉の根拠になっている技術の分野では素材や製造機械、組立技術など、全てにわたって共通化が進み、技術の国境が希薄になって東西にわける意味がなくなってきている。ハード面での「文明の区別」自身はその意味の重要性を失うのは時間の問題となっているのではないだろうか。

水を文化の面からとらえると、「日本の水の文化」とは何であろうか、そこには日本人の置かれている環境や、精神的な面での理解が求められるのではないだろうか。日本人には、古くは家に水を引き込み、池園回遊式の庭園に利用するとか、水琴窟などの精神的美学があった。勿論、廃物の外部への排出のような利便性もあった。ローマ人の「ローマの水の文化」は庭園の噴水や、公衆浴場など生活や政治的に直結した実利的なことに利用するのが主体であった。しかし、日本には水に対する政治性は、民生統治の手段としての重要性に合せ、美の具象化の手段としての文化があり、「水の文化」には西欧と日本には根本的な違いがある。

高温多湿の日本では、常に水とともに豊富な自然があり、古くから神的な畏敬の念が醸成されてくる土壌があった。しかし、西欧においてはギリシャ、ローマの時代から現在まで水に関する精神的・美学的な文化は日本とは違い、むしろ彼等の文化的・美的な意識は建築物にあり、日本以上に古くからの街並みの保存には熱心であるように思われる。

今後、文明は地球規模でのグローバル化・情報化の進展によって一層共通化し平準化されてくるであろう。しかし、文化のグローバル化は不可能で、各民族の歴史感に根差したものでありむしろ保存が必要になるであろう。日本は山紫水明の地と言われ、水に関する文化も数多くある。未来永劫に、日本の「水の文化」を守る風土が途絶えることなく子々孫々に伝えられることを祈りたいものである。